

十二（自由に在りたかったから）

翼彩つばさみずみと蒼泉あきずみは、改めて志妙庵しみょうあんの客人となった。

四畳半ほどの土間がふたつあるだけの簡素な庵のなかで、燭台の灯火が不安定に揺らめく。

二人は土間の西端に敷かれた莫座もくざに正座して志妙尼と向かい合う。

土間の東側に正座する志妙尼の脇には、茶盆が置かれている。

翼彩は右側に座る蒼泉の懐から、胸元を覗き込む。

まださらしのように包帯が巻かれているのが少しだけ見えた。

大丈夫？ と聞こうとする翼彩の顔色を察したかのように、蒼泉が無言で、力強く頷く。

その無表情は、心配しないで下さい——という無表情に見えた。

蒼泉は左側に座る翼彩の頬——それに顔全体が上気していることに気づく。

頬や頬に汗で張り付いたショートヘアを見る。発熱したのか。

大丈夫ですか？ と聞こうとする蒼泉の顔色を察したかのように、翼彩がぎこちなく微笑む。

「さつきは、取り乱してしまつてごめんなさいね」

そう言いながら志妙尼は、リリイたちに熱い番茶と落雁らくがんを出す。

「そんなつ、わたしなんかいつも取り乱してます」

翼彩は、いただきますと落雁を手に取り、あつこれ麦落雁だ、いい匂いですよねと言いながら、麦落雁を口

に放り込み、番茶を続けざまに流し込んで口の中で溶く。

蒼泉は、お行儀がと言いながら翼彩の膝をびしゃりと叩く。

そして、落雁にも番茶にも目もくれず——私はどうしても知りたくてここにやってきたんです、と口を開く。

「庵主様と晶良さんが、どうやって添い遂げたのか——。でも、入ってきてすぐにわかりました」

えっえっ？ と、翼彩が、蒼泉と志妙尼の顔を交互に何回も見ろ。

「添い遂げたってどういうこと？ 晶良さんって誰？ みずみず——？」

蒼泉は自分の口に人差し指を当てて、翼彩の質問を制する。

「庵主様、お聞かせください。なにもかも」

志妙尼は蒼泉の視線の先を察して、自分の湯呑みに番茶を注ぐ。

「そうね——あれは十六年前になるかしら。大相撲の秋場所で竹王将閔が優勝した年だから——」

「ちくのうしようぜき？ そんなお相撲さんがいたんですか？ なんだか耳鼻科に通ってそんな名前ですわね」

翼彩が地べたに手を突いて身を乗り出す。

「あら、よく知ってるわねえ。鼻が悪かったからそんな四股名が付けられたのよ」

「そうなんですか！ みずみず、わたしスゴくない？」

じゃあわたしがお相撲さんだったら火粉将閔かなあ、と突っ張りの真似をする翼彩の膝を、蒼泉は、どうし

ていつも話を横道にと言いながらびしゃりと叩く。

「ヒュージによる街の破壊が日に日に激しくなっていくただけで、あの時分は、まだヒュージが何なのか、

今よりずっとわからなかったし、CHARMなんてものもなかったから、私たち尼僧なんて無力な存在だった

のよ。出来たことはせいぜい——」

終ることのない祈祷と葬儀、それに被災地での炊き出しぐらいかしらね——と、言いながら志妙尼は番茶を啜る。

本来の僧侶ならそれでも十分のはずだが、リリイという概念のある現在においては、翼彩の感覚ですら、いささか頼りなく感じられた。

「私と晶良は同じ山形出身だったからすぐに友達になったわ。だけど、そんな明日の命をも知れない状況だったから、いつからか——しがみつくかのように互いに寄りがあって、互いを共有しあって、互いを独占しあうようになったの——」

蒼泉が、赤面して後ろめたそうに志妙尼から目を逸らす。

「不邪淫戒ふせやんけいのおとがめがあつては、お寺にいるのはさぞお辛かつたでしょう」

蒼泉の問いに、阿闍梨から訊いたのね——と言いながら湯呑みを地べたに置く。

かようにヒュージ災害で絶望的な空気の折、不邪淫戒を破るなど、不道徳にも程がある！——と、やや芝居がかつた口調で、志妙尼は当時の阿闍梨たちの口真似をした。

本来なら破門と相成るところ——大日如来様の深いご慈悲によつて、嚴重注意と処す！なお、二名の阿吽の陣は解消のこと、肝に銘じるように——！と、まるで講談師のような弁舌を振るう。

「でもね、おとがめを受けたその日の夜、私たちは決めたの」

「結婚——ですね」

蒼泉が、間髪入れずに言葉をつなぐ。

「ちよつとちよつと待つて、わたし話から置いてけぼりになつてるよ——。不邪淫戒つて？ 庵主さまと晶良さんは、誰と結婚しようとしたの？」

翼彩が慌てて二人を見る。

蒼泉は、耳たぶまで熱くなるのを感じた。

翼彩の瞳を正視できなくて、子供に出生のメカニズムを聞かれてしまった母親のように戸惑いながら、観念したのち、土間の壁に架けられたポートルートを恥ずかしそうに指さす。

「えっと、翼彩様——。要は志げさんと晶良さんは、あ、愛し合っていたんですよ。その花嫁たちは、誰かと結婚するのではなく——」

は、花嫁同士が結婚するという場面を想定した写真なわけです——。

蒼泉は口ごもりながら、そう告げた。

翼彩の網膜の奥を見てみたかったが、うつむいてしまった。

どんな瞳をしたんだろう——。蒼泉は、横目でちらりと翼彩の横顔を見た。

翼彩は、ぬるくなつた番茶を音を立ててごくりと飲んだ。

頬は、発熱とはまた違った感じで紅潮していた。

その瞳は、きらきらと輝いていた。

「女の子同士の結婚なんて、庵主さま——すごい——!」

蒼泉は、翼彩の軽やかな羽のような何かに救われた気がした。

志妙尼はため息をひとつついたらあと、梁を見上げ、まだ残暑が終わっていない大安吉日の晩だったわ——と、少しづつ思い出すかのようにつぶやき始めた。

「私たちは真鍮蟲しんちゆうむし、って呼んでいたんだけど、今でいうスモール級の昆虫型ヒュージが、この御山に沢山現れ

たのよ」

昆虫型は、スモール級の代名詞とも言える、金色の竈馬かまじうまのようなヒュージで、一体一体はさほど強いわけではないが、軍隊蟻のように集団で襲いかかってくるため、非力な者や少人数では手が回らず、結果的に甚大な被害を招いてしまうことが多い。

「お寺の子たちはそれこそ法剣や錫杖、独鈷杵、三鈷杵、法輪といった法具から、竹箒やおたま、物干し竿まで握りしめて応戦したわけ」

志妙尼がポートレートを指さして、あれ——とつぶやいた。

「その騒ぎに乗じて——あらかじめ作ってあつたあれを抱えてね」
わあ——と。

「自分たちの腕に傷をつけて血を流しながら大門を飛び出して、石段を走りながら駆け下りて、お寺からね——二人して逃げてやったんですよ」

狂つてたのよね——、と付け加えながら、志妙尼は両の袖を捲る。

そこには、ざつくりと切られた古傷が幾つもあつた。

な、なんで傷を——、と翼彩が肩をすくめる。

「大量のヒュージを血の匂いで引きつけたの。だからお寺のみんなは助かったはずよ」

翼彩が、また地べたに手を突いて身を乗り出す。

「でも庵主さまたちは、ヒュージを引きつけてどこに逃げ切るつもりだったんですか？ お寺の子たちが助かって、それではお二人が大ピンチです」

いえ、逃げ切ったら、二人の結婚は成立しないんです——と蒼泉が言う。

「え——？」

「ですよね、庵主様」

志妙尼は無言で、目を細めて頷く。

「私たちは、もう足場がないって崖までヒュージを引きつけたのね。十四、五体はいたのかしら。かなりのヒュージが崖から川に落ちて、それでも残ったヒュージが私たちの脚元から絡みついてくるのよ。鋸のこぎりみたい
なヒュージの脚に、私たちは僧衣も袈裟も引き裂かれ、背中を削られて、手足の皮膚と肉を切られて——」

大きく息を吸いこみながら、なるべくシヨックを最小限に抑えようとして、両手で頬から耳を覆い、肩をすくめて話を聞く翼彩。

聞き方を変えても内容は変わらないですよ、と蒼泉がささやく。

「真鍮蟲がね、尖った口で手足を刺してくるのよ。痛かった。晶良は『ちゃんと』、鼻から脳を貫かれて死に
ました。でも、私は——」

暴れて真鍮蟲を倒してしまつた——、と嘆いた。

翼彩は鼻を押さえながら、その場の痛々しき、悲しさを想像した。

そして、志妙尼の言葉の使い方に、ふと違和感を覚えた。

——ちゃんと、つてどういうことだろう？

蒼泉は、翼彩の疑問を察したかのように、ちゃんとはちゃんとです——と答えると、再び志妙尼と向かいあ
う。

「私どもの阿闍梨に、庵主様方ご二人の記録や伝聞を伺つたとき、お寺を抜けたあなた方を指して『駆け落ち』
と表現していたのですが、違いますよね。駆け落ちじゃなくってそれは——」

『心中です』

蒼泉と志妙尼が同時に言葉が発した。

蒼泉の左袖が引つ張られる。翼彩の手だ。

「みずみず、庵主さまの大事な——晶良さんっていう人は亡くなったんだよね？　心中したら結婚できないよね？　添い遂げた”ことにならないんじゃないの？」

散歩の途中で道がまったくわからなくなった幼子のような心細い目で、翼彩は蒼泉の袖を引つ張つて揺らす。「今のところ日本では、完全な形での同性結婚はできません。けど、庵主様と晶良さんが思い描いた完成形なら、少なくともご兩人にとつて満足な結婚にはなるんです」

それが、あの写真です——と言つて、蒼泉は再び土間の壁にあるポर्टレートを指差す。

翼彩はよろよろと立ち上がつて、またもポर्टレートの歩み寄ろうとする。蒼泉もすかさず立ち上がり、翼彩の右腰に手を回して身体を支える。

左側にはウエディングドレスの花嫁。顔だけモノクロ写真が貼つてあり、横には『晶良』と書いてある。

右側には白無垢姿の花嫁。やはり顔だけモノクロ写真が貼つてあり、横には『死げ』と書いてある。

上の字、読めますか——と蒼泉が訊く。

え、目悪いからわかんない——、とつぶやきながら翼彩が目を凝らし、つま先立ちになつてなんとか解説する。

「——納、奉つて書いてあるよ」

奉、納です——と、蒼泉が右、左と指をさす。

「これは『ムカサリ絵馬』といって、庵主様の地元、山形県村山市を中心に伝わる——死後結婚の様式なんです」

「むさかり？ むかさり？」

蒼泉は翼彩の問いに、ムカサリです、迎えが来て去っていくという、花嫁や結婚そのものを差す山形弁です——と説明する。

「未婚のまま亡くなった方を遺族が儚はかなんで、死後に特定の生者や死者、もしくは、生きていたらやがて出逢ったかもしれない架空の相手と婚姻を結ばせる——いわゆる死後婚、冥婚というものがあるじゃないですか」

「そんなことできるんだ！」

「いえ、できるっていうかあくまで風習です。こういうのは、古くから世界各地にあるんですけど、山形県村山地方の死後結婚の様式は、結婚式を挙げている想定の絵や、生前の写真をコラージュしたような、オリジナルの絵馬を作ることなんですよ」

翼彩はポートレートを見る。

ウエディングドレスのカラー写真に、モノクロの少々ピントが甘い顔が貼られた、『晶良』の花嫁姿。

ああ、こっちは遺影なんだな——と理解した。

二年前にヒュージの戦災で、未婚のまま亡くなった姉の姿を重ねる。

こんな心のこもった絵馬を作ってあげたら、お姉ちゃん喜んだかな、と想像して。

家族みんなで集まって、やあのやあの言いながら、一番写りの良い姉の写真をアルバムから選んだり、不器

用ながら切り貼りしていると、ころを想像して。

大きく見開いた翼彩の目頭から——一滴だけ涙が零れた。

「生前葬のつもりも兼ねて、二人でムカサリ絵馬を作ったの」

ポエムを代わりばんこに書いたりして楽しかったわ、と言いながら、翼彩の空いた湯呑みに番茶を注ぐ。どうぞと言われて、翼彩と蒼泉がひたひたと地べたを歩いて莫塵の上に戻る。

ムカサリ絵馬ではないかと気づいたとき、最初はとても感動しました——と蒼泉が切り出す。

「同性結婚の手段としてムカサリ絵馬に着想したのは、村山地方出身の庵主様ならでは、この世の法律からも倫理からも解放された自由な発想だな、と思いました。一瞬憧れたりしました。でも、この結婚を成立させるためには、ご二人のうちどちらか、あるいは両方か、いずれにしても当事者の死が必要になってしまいます」
私には、想い人との死別がなくては成立しない結婚は受け入れられません——と、志妙尼の眼を見ずにうつむきながら言った。

最初は二人とも死ぬつもりだったの——と志妙尼も頷く。

「ムカサリ絵馬を人目につくところに置いて、晶良の後を追って、私も死ぬつもりだった。でも死ねなかった。晶良が死ぬ直前に、言われてしまったから——」

死んじやダメって言われたんですか？ と訊く翼彩に。

そう、『生きてけろ』って言われたの——と、山形弁を交えて答えた。

「晶良はきつと、今際の際に気づいたのよ——この結婚には、未来がないって」

——と、声を震わせた。

その眼は充血して、涙が零れそうだった。

お二人は死別する直前まで、心の風土病に罹^{かか}っていたんだと思います、と蒼泉が言う。

心の風土病とは——？ と志妙尼が問う。

「異性でも同性でも、カツプルにとつて、結婚は必ずしも完成形ではないと思うんです。それに、ゴールじゃなくてリスタートだとも思うんです。結婚は素敵だと思えますけど、死亡しないうとできない結婚よりも、結婚している人たちに負けなくらい幸せになることを考えるほうが、発展的だし刺激的です。そもそも——」

「みずみず、結婚のこといっぱい考えててすごい——！」

「！——えっと」

不意に、開いた手のひらを合わせて素直に感動する翼彩の無邪気な横顔と、志妙尼の顔を交互に見てしまい、何かを曝け出してしまった気がして、赤面しながら口ごもる。

「そ——そもそも死後結婚は、生きたくても、生きられなかつた人たちの、未来を、想像で、補填して供養——供養する儀式だと思うんです。生きている人間が——その、死後結婚のために命を棄てるなんて、本末転倒ですし悪戯が過ぎると思いますし、他の幾多のムサ、ムサ——もうっ」

何だかたまたまなくなつて、翼彩の右膝をびしゃりと叩く。

何で？ 何で？ ときよろきよろする翼彩を見ないように、大きく深呼吸をしたあと、軽く咳をして、背筋を伸ばしてから続ける。

「——他の幾多のムカサリ絵馬に失礼です。そんな想像も働かないくらいに、若いころのお二人の視野が狭^{きょうせやく}くしていた。山形県村山地方のムカサリ絵馬という存在を知っていたからこそ、その方法しかないという錯覚に陥つてしまった——そういう意味で、心の風土病と言わせていただきました。さぞお気を悪くされたと思いま

す」

色々無礼をお許し下さいと頭を下げながら、蒼泉はなんとか自分の考えを話し切った。

志妙尼は、深呼吸をして、魂を吐き出すかのように吐露した。

「あなたの言う通り、わたしは一時の熱に浮かされて狂って、死後結婚の儀式をしてしまった——。なのに、生きろって約束させられてしまったから、二人に永遠にこない未来を紡いでいかなくちやいけないの」

「それで、絵馬に書いてある名前は、『志げ』さんじゃなくって『死げ』さんなんですね」
「どういうこと？」

翼彩の質問に、蒼泉が二人の花嫁写真を左、右と指差す。

「ムカサリ絵馬は、結婚をする片方を死者、片方を実在の生者にしてしまうと、生者は死者に引っ張られてしまふという言い伝えがあります。ですから生き続けるために、晶良さんの死後、ご両名の名前を書くときに自分の名前を一文字変えて、架空の人物ということにしたんです」

ムカサリ絵馬を信じて製作した以上、そういうジレンクスもセットで守るのが筋ですから——と付け加えた。「生き続ける以上、少しでも晶良のものは手放したくなくなってしまうって、このムサカリ絵馬は、絵馬なのにどこにも奉納できない——死後結婚として完結させることができないの——結局」

みじめに生きてるだけなのよ、私——と志妙尼は漏らした。
しばしの静寂のあと、突然。

「それって素晴らしいことです！」

左手に湯呑み、右手に落雁を持っていた翼彩が、膝立ちで叫ぶ。

膝立ちに姿勢を変えたときに右膝が右手に当たり、落雁が番茶の中にとぶんと落ちる。

急に座高を上げた翼彩の瞳を、蒼泉が横から見上げる。

網膜は見えなかつたけれど、深い色の虹彩がきらきらと輝いていた。

「あのつ——、晶良さんは亡くなつてしまいましたけど、最期に庵主さまを生かして下さいました。そのおかげで庵主さまと晶良さんの物語は、今日——わたしとみずみずの心に転生して生き続けることになったんです！」
転生——ですか？ と、きよんとした無表情で、蒼泉が翼彩の横顔から顔色を覗き込む。

まるで植物学者が人気のない山岳で苦難ののち、新種の花を見つけたかのような、喜びと感動に満ちた横顔だった。

「庵主さまたちがなさつたことが成功したかとか、正しいかどうかとかわかんないけど——お二方が想い合つた気持ちには間違いなくつて、わたしなんかで申し訳ないですけど——お二方の気持ちは、一生この心に生き続けます」

翼彩が、自分の薄い胸をぱんと叩く。気管が炎症を起こしているため、けひけひと咳き込む。

「そして、わたしも誰かにきつと語り継ぎます。するとまたその人の心に転生します。そんな素敵な輪廻りんね、庵主さまが今日まで生きていて下さらなかつたら始まりませんでした。全然みじめなんかじゃないです。少なくとも——」

庵主さまの恋物語のバトンを受け継いだみたいで、わたしは羽が生えたみたいに幸せです——と、満足そうな微笑みを浮かべた。

蒼泉はそんな翼彩の表情を見て、理由もわからず——。

自分の心の制御に困るほどの高揚感を感じた。

ある意味、彼女の言うとおりにかもしれないですと同調する。

「ガーデンの僧籍名簿データにあつたご両人の情報は、出身地などのほかは、『破門』『行方不明』のみでした。拙僧共の阿闍梨が又聞きで、やれ不邪淫戒を犯した、やれ駆け落ちをしたとだけ補足説明したものの、庵主様がこうして生き続けてお話をして下さらなかつたら、ご両名の壮絶な恋物語は、いづれ誰の記憶からも消えて、奉納できないムカサリ絵馬やこの庵と一緒に、木屑紙屑として朽ち果ててしまつていたことでしょう。なにせ——」

常日頃から近づいてはいけない場所と教わつていますから、と結ぶ。

嫌な言い方をしてしまつたかも知れない——。蒼泉は空気を換えようと、落雁が入つた番茶、新しいのに換えてもらいますか？ と訊く。

翼彩は、甘いお茶になつたから羽が生えたように幸せなの——と満足そうな顔をして、両手で湯呑みを持つて啜つた。

「さつき言つた転生のお話とお茶と、同じ幸せの表現なんですか」

「うん、どつちも羽が生えたみたいに幸せ」

訝しい無表情で尋ねる蒼泉に、翼彩は笑顔で答えた。

少し救われた気がするわ——と、志妙尼は安堵の表情を見せる。

「悪戯と言われようと、心の病と言われようと、私たちは真剣だつたの。私たちは——過ちであろうと、道標みちびらのひとつを示したかつたの」

あの寺で恋いをしていた、大勢の尼僧のために——と言つて、鹿野苑高女のある方向を見遣る。

蒼泉も速い目をして、志妙尼と同じ方角を見た。

翼彩は、そんな蒼泉の横顔を見た。

なんて悲しそうな無表情だろう——と思った。

庵の外では相変わらず、北風が壁板を鳴らし、時折笛のような隙間風の音が聞こえるたびに、燭台の蠟燭の火が揺れ動く。

「今日は、久しぶりに若い子たちとおしゃべりできて、少し気を楽にさせてもらって——うれしかったわ。もう遅いから、二人とも朝までお休みなさいな」

志妙尼は、朝になって体調が戻ったらガーデンに戻るといいわ、と、眼を細める。

燭台の蠟燭を消そうとする老僧に、ちよつと待って下さい、と蒼泉が手を出して制する。

「庵主様——私も彼女も、まだ成すべきことが残っているんです」

そうだよ、だから今日はねんねんして明日頑張ろうよ——とにこやかに相槌を打つ翼彩に、蒼泉は声にならない声で、えーつ、と驚く。

「ちよつと翼彩様、この庵で眠れるんですか？」

「さつきまで寝てたし、まだ熱も下がってないみたいだからね」

お嬢ちゃん、もうええでしょ——という志妙尼の声が聞こえる。

「え——これまでの話を聞いて眠れますか？ 気づいてないですか？」

「わかんない——つーは馬鹿だから、何に気づいてないかも気づいてないよ」

早く寝ろという、志妙尼の声が聞こえた。

「あり得ません。眠くたって、眠れる訳ないやないですか」

蒼泉が即座に言葉を返す。

おぼこ、それ以上詮索するもんでねえ——と、枯れ木に布をかけたような背中が、静かに、しかし強く気圧すかのように蒼泉を諭す。

そのあと、志妙尼がゆっくり振り向いた。

蒼泉はすかさず志妙尼の網膜を——まるで高所から湖底にダイブするかのような勢いで覗き込んだ。

老僧の水晶体が藻のように明瞭としない物に阻まれたかのように感じられ、網膜の底まで見ることが出来なかつた。でも。

この老僧は——激しく怯えている。

蒼泉は、自分の勘が間違っていないことを確信した。

「寝ろと仰せならお伺いしますが庵主様——そもそも」

この庵はなんのためにあるんですか——？ と、蒼泉が問う。

しばしの沈黙のあと、志妙尼が口を開く。

「この庵は、行くところも帰るところもなくなってしまった私の——」

いえ、庵主様のお心の話ではなくて——と志妙尼の言葉を遮る。

「なんでふた部屋あるのか。なんで床もなく地べたなのか。なんでこんな崖沿いの立地の悪いところに作ったのか。なぜ囲炉裏のある土間でなく、地べたの土間に病人の翼彩を寝かせたのか——とか、そういう根本的なことを問うております。それと、なんで——」

晶良さんのお墓が見当たらないのか——です、と言って、一旦話を止める。

ぼかんとして、二人の顔を交互に見る翼彩。

志妙尼の眼は焦点を失い、顔を強張らせて押し黙っていた。

蒼泉の無表情な横顔は、その場の全員に覚悟を要求するかのような、重い無表情だった。

翼彩が、蒼泉の左裾を引つ張つて揺する。

「ねえみずみず、どうしたの？ 庵主さま困つてるよ。悲しそうな顔をしてるよ、もうやめてあげて。三人でねんねんしようよ——」

「ダメです。ここでやめたら、翼彩様も私も本懐を果たせません。庵主様も苦しまれたままです。そして死んだ晶良さんも——未来永劫成仏することはないでしょう」

志妙尼は大きく息を吸つて蒼泉を睨めつける。そして、袖から出した数珠を左手に握りこむ。数珠が手の震えでかちやかちやと音を立てる。

「晶良は、すんだども——すんだども——」

「死んだけれど、転生したとでも仰いますか」

「そだ——毎晩出てきでくれる——歌さ聴いでくれる——」

「冷静になつて下さい庵主様。あなたの晶良さんは——」

蒼泉は、自分らが座つている足許の地べたを見て。

「ずうつと前に、この土の下に還つて——それきりですよ」

えつ、と声を発して、翼彩が正座から膝を崩して、土をすべすべと撫でる。そして蒼泉の顔を二度見する。

「——いるの？ 晶良さんが——？ この下に部屋があるの？」

部屋なんかないですと答えたあと、私の見立てに過ちがなければ——と、蒼泉が切り出す。

「晶良さんが昆虫型ヒュージに刺されて亡くなった——先ほどのお話に出てきた場所は、多分ここです。そしてこの庵は——庵主さまが土の中で眠るご遺体と暮らすために作られた、晶良さんのお墓そのものなのではな

いでしようか——？」

土を撫でさすっていた翼彩が、ひっ——と短く声を発して飛び退く。

「——ご遺体——？」

尻餅をついて——改めて庵全体を見渡す。

随分簡素な造りだと思っていたが、若いころの志妙尼が女の細腕で、一人で土台から作ったと考えると、むしろよくぞここまで——という印象に変わる。

床がなくて地べたであったことも納得がいく。

これが——墓なのだろうか。

ご遺体と暮らすための。

目覚めたときに感じた複雑な香りも——思い起こせば何度か嗅いだ覚えがある。ヒューズ災害のとき、遺体が安置されていた場所で、その臭いを和らげるための香だ。

「じゃあみずみず、晶良さんは亡くなつてからずうつとここで——」

「確信はありませんが、多分そうです」

蒼泉はそう言つて、再び志妙尼と向き合う。

「私の見立て、間違つていますでしょうか？」

志妙尼は、首を横に振つた。

「確かに——晶良は、死んでから——すんでがら、土に還るまで、ずっと見守つてた。埋めたり茶毘だびに付したりしまつたら、もう逢えなくなつがらな——」

九相くそうをこの眼で見守つた。ずっと一緒だった、幸せだった——と言つた。

「なるほど——埋めたのではなく、焼いたのでもなく、九相図をやってみせたのですね」

確かにここが墓の中なら、遺体遺棄ではない、という方便もありますが——と蒼泉がつぶやく。

九相図って何？ と尋ねる翼彩に、蒼泉が授業で習ったはずですよ、と言う。

「九相図というのは、人の無常を描いた仏教絵画の様式です。人が亡くなってから土に還るまでを、九つの段階に分けて図にしたためたものと言いますか——。作品によつてどの状態をチョイスするかが異なるんですが、だいたいは生前の姿から、死体になって、腐乱して、変色して、腐敗ガスで膨張して、皮膚が破れて腐った肉や脂がまろび出て、鳥や獣や虫に喰われて、骨になって、骨すら分解されて——といった、その——翼彩様？」

翼彩は口に右手を当てて気分が悪そうにうつむきながら、左手でちよつと待つてという手つきの壁を作る。蒼泉が翼彩の背中をさすると、それもやめてという手つきで必死に固辞する。

十数秒経つて深呼吸したあと、ようやく平静を取り戻した翼彩だが、虚ろな眼で地面を見つめるしかできなかった。

「わたし——その上で寝てたんだ——」

蒼泉が、翼彩の制服の背中についた**莫蔭の蘭草**^{いぐさ}の**纖維**をそつとつまんで捨てる。

そして、庵主様——と向き直る。

「九相図は生者への執着を断ち切るための絵図であつて、執着を継続するための方法として実践するなど、常軌を逸していると思います。もちろんそれは当人同士の自由かもしれませんし、私は人様を破戒だ外道だと咎めるほど、道徳や戒律を愛する者でもありません——でも、私どもが抱えている事案との因果関係がはつきりした以上、その思いも行いも、ここで断ち切るべきだと考えます」

因果関係——？ と、翼彩が蒼泉に小首を傾げるやいなや、志妙尼は眼を伏せたまま立ち上がり、断ち切れ

ねえ、と強い語気で言い放った。

「すんでから毎日、晶良の肌ざわりが変わんだ。あんな素敵な思ひは——」
おぼこたちにはわがんねだろ——。

そう言つて蒼泉から背を向けて、屈んだ姿勢で和筆筒の前に座り直した。

蒼泉は少しだけ眉をしかめて話を続ける。

「この十四年間で、未確認種のヒュージによる被害が相次いでおり、現在拙僧共のガーデンでは、討伐に頭を悩ませています。その容貌は——庵主様ならご存知ですよね」

志妙尼の背中へ、なにも答えない。

「その容貌は——私、図鑑で調べたんですが、オニゲナという菌類に非常にイメージが近かつたんです。オニゲナはラテン語の学名で、日本名をホネタケといいます。イタチなどの動物の屍骸や頭蓋骨に生えることからその名前が付いたようです。発見例は世界でも数例で非常に少ないのですが、そのなかのひとつが、山形県最上郡——二戸晶良さんの故郷でした」

「えっそれって、今日借りたあの図鑑？」

「あの図鑑です」

「二戸晶良さんの故郷って書いてあつたの？」

「いえ、そんな個人情報を書いてなくて、山形県最上郡○○村で採取つて書いてあつただけです。それがデータ照会した晶良さんの出身地と符号したんです」

志妙尼が和筆筒の引き出しを開ける。

翼彩には、引き出しの中に何か——輝くものが見えた。

蒼泉が右手と左手を順に上げ、それを合わせるようにして説明する。

「整理するところいうことですね。——庵主様が山形県村山地方からムカサリ絵馬という概念を、いわば嫁入り道具として持ちこんできたように、晶良さんも山形県最上郡から、オニゲナの菌糸という予期せぬ嫁入り道具を持ってきてしまった」

翼彩は、志妙尼の手に輝くものが何なのか、眼を凝らしてよく観察した。

——あれは、持鈴じれいに見える。

とてつもなく厭な予感が、きりきりとした腹痛となつて、翼彩の下腹部を襲つた。

これ以上、庵主さまを追い詰めないほうがいい——。

みずみず、やめようよ——と蒼泉の制服の肩を引つ張るが、やめたらこちらが死んでしまいます——と返されてしまった。

蒼泉が、大きく息を吸つて話を続ける。

「——そして、襲われて亡くなつた晶良さんのご遺体を、庵主様が茶毘だびに付さなかつたせいで、オニゲナの菌糸は豊富な栄養源とともに残り、ヒュージの細胞片と融合して——」

「晶良さんのご遺体を菌床とする——新しいヒュージが生まれたのではないでしようか」

ひつ、と、気の抜けたような声を発する翼彩。

「あのヒュージは、晶良さんのご遺体に寄生してること？　だとしたら——」
今、この土の中にいるの——？　と聞くと。

蒼泉は、無表情で頷いた。

その無表情は、緊張に満ちた無表情だった。

翼彩の肩から背中に、再び冷たい砂のような恐怖感が流れた。

——今まで判明している特徴を思い描く。

ヒュージ細胞とオニゲナの胞子が融合して誕生したヒュージ。

キノコのヒュージだから、菌床を離れることができない。

無理やりにも菌床から離れたら、体力が激減してしまう。

原則的に一步も歩けないから、胴体を伸ばして極小のケイブをくぐり抜け、狭い範囲でのみ捕食活動を細々と行う。

極小のケイブを通って遠くへ移動していたから、光潤隊が山狩りをしたときは菌糸を残して留守中であり、極めて感知しづらい状態だった。

推測が荒唐無稽な感は否めないもの——大方、合致する。そもそもヒュージという新生物自体が、生態系や常識をひっくり返す荒唐無稽な存在なのだ。

後ろを向いたまま、志妙尼が語り始める。

「ヒュージかも知れねえけど——でも、晶良の転生ならな、そんなことはどうでもえがった。その証拠に、私を襲ったりはしながった」

それは幸いですが、やはりヒュージはヒュージでしかありません——と蒼泉が切り返す。

「あなたはヒュージと過ごした期間、充足感を味わえたかもしれませんが、俗世では、判明しているだけで十人もの罪科つみとがのない衆生が、ヒュージの犠牲になっています。このヒュージはおそらく二年ほどで晶良さんの

ご遺体から養分を吸い尽くし、庵主様を襲わない代わりに、一定の周期で人を襲って養分を補給していたんです。わかっているからこそ、翼彩をご遺体の近くに寝かせたんでしょう。ヒュージの養分にするために」
十年以上も、一体どんな楽観をご自分に言い聞かせて騙してきたんですか、と問うと。

「——すらねえ」

志妙尼は、細かく震えるように首を横に揺すり、吐き捨てた。

庵主さま、と翼彩が声を発する。

「庵主さま——ごめんなさい。もしみずみずの話が本当なら、ヒュージをやっつけなきゃ——」

翼彩がゆつくりと拳を握りしめる。

蒼泉は、庵主様——どうか、ヒュージをなだめたままお引き渡し下さいと言つて、正座したまま深く頭を下げた。

「荒事は望んでおりません。しかし——衆生の方々の屍を重ねても、ヒュージの残虐性から眼を逸してでも、ヒュージを相手に愛を貫き通したのであれば、拙僧共もリイですので——調伏アサトさせていただきます」
翼彩は意を決したかのように、蒼泉の顔を見る。

「みずみず、わたしもやるね。わたしだつて破門されたけどリイだから！ 二人の最後の戦いだから——！」
「は——破門？」

蒼泉が眼を丸くする。

その時。

志妙尼が持鈴を持った右手を軽く上げて、ひと振り鳴らす。

涼しげで軽やかで——しかし厳かな金属音が、庵全体に響く。

「あの子はな——十六年も一緒に居てくれだ——」

御詠歌も覚えてくれだ——と、少しだけ横顔を見せた。

涙腺からは幾筋の雫が、皺くちやの頬を複雑な軌跡で流れていった。

あとは、おぼこたちで見極めでけろ——と言うと。

もうひと振り、持鈴を鳴らす。

そして、完全に翼彩らに背中を向けて。

川の流れる音を背に、清らかで幽かな歌声を庵の中に響かせ始めた。

(続)

十二(自由に在りたかったから)PDF版

発行日 2018年4月2日

著者 DOGMASK
<https://www.pixiv.net/member.php?id=873859>

連絡先 <http://dogmask.blog129.fc2.com/>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
